

前置き

日本哲学史専修が発行する『日本哲学史研究』第14号では、「京都学派の知の新解釈と継承」をテーマとする特集を組みました。

「京都学派」の哲学、この学派に属する、あるいは関連する哲学者の思想を論じ、解釈や応用を目指した研究はすでに多数発表されており、既に十分な研究の蓄積があるかと思えます。京都大学は、「京都学派」という、文学部で形成され1930年代に開花した学派の知を誇りにしていると言えます。この知の遺産を、学内外の研究者や日本哲学に関心を寄せる人々に伝えつつ、継承してゆく役割を担う、本学の中心的媒体がこの『日本哲学史研究』です。

京都大学では、現在、人文知の国際化が推奨されていますが、その一方で、機会あるごとに京大の人文知の伝統を支えているのは、「京都学派」の知の遺産であるというようなことが、確認されます。日本哲学は、この分野にかかわらない人々にはよく知られていませんが、実は、世界を舞台に確実な歩みを進めており、しかもその歩みを速めています。そして、日本哲学の核心部分を支えていると言えるのが、「京都学派」の知でありましょう。

このような状況にあるなか、「京都学派」の知が、どのように新解釈され、継承されるのかを問い直してみたいと考えた次第です。それは、新解釈により日本哲学が新たな知へと豊かに発展するであろう、このように期待にほかなりません。

折しも、2016年度、本学からこのような研究課題に取り組むための支援を受けました。「知の越境」融合チーム研究プログラム (SPIRITS : Supporting Program for Interaction-based Initiative Team Studies) において、日本哲学史専

修が提案した「京都学派の遺産に基づく越境的知の国際ネットワーク形成」という研究プロジェクトが、採択されました。本号は、その研究成果を含みます。また、このプロジェクトに関連させて行った研究も成果として掲載しています。その一つは、本専修が主催する定期講演会「日本哲学史フォーラム」での提題です。それでは、「京都学派」の新たな知の展開に取り組んだ、八人の研究者の思索をお楽しみください。

上原 麻有子